

## ジゼール・ブルレの音楽美学における時間の発生の 問題：声の身ぶり、メロディー、リズム

|      |   |
|------|---|
| 著者   | 山下 尚一   |
| 内容記述 | 筑波大学博士（文学）博士論文・平成22年7月23日授与（甲第5534号）  |
| 発行年  | 2010  |
| URL  | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00140879">http://hdl.handle.net/2241/00140879</a> |

|             |  |
|-------------|--|
| 氏 名 (本籍)    | 山 下 尚 一 (栃 木 県)                                |
| 学 位 の 種 類   | 博 士 (文 学)                                      |
| 学 位 記 番 号   | 博 甲 第 5534 号                                   |
| 学位授与年月日     | 平成 22 年 7 月 23 日                               |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 1 項該当                               |
| 審 査 研 究 科   | 人文社会科学研究科                                      |
| 学 位 論 文 題 目 | ジゼール・ブルレの音楽美学における時間の発生の問題<br>－声の身ぶり、メロディー、リズム－ |
| 主 査         | 筑波大学准教授 博士 (哲学) 廣 瀬 浩 司                        |
| 副 査         | 筑波大学教 授 博士 (文学) 川那部 保 明                        |
| 副 査         | 筑波大学准教授 濱 田 真                                  |
| 副 査         | 東京電機大学工学部教授 本 郷 均                              |

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、フランスの音楽美学者ジゼール・ブルレ (1915-73) の音楽美学が孕む諸問題を、「時間の発生」という観点から批判的に考察することを主たる目的とする。たんにブルレの音楽美学そのものを内在的に考察するだけではなく、それを別の音楽論・時間論に突き合わせることで、その哲学的射程を明確化し、これまで見過ごされがちであったブルレの理論が、現代の音楽論・時間論の刷新につながることを示す。

第一章では、ブルレにおける「時間」の概念の意義を検討した上で、それがどのように演奏の実際的な身体へと移行するかを検討している。それとともにブルレのスピリチュアリズムの源泉をたどり直し、メヌ・ド・ピランの「アクティヴィティー」概念、ルイ・ラヴェルの「アクト」概念などを参照しながらブルレの理論の特徴を明確化し、時間の発生、時間の現実化＝現在化＝アクチュアル化という問題の重要性を指摘している。

第二章では、ブルレ独自の「声の身ぶり」という概念を論じている。これはブルレにおいて、たんに物質的・経験的な身体の声の身ぶりとしてではなく、精神と身体境界、さらに美と社会の境界に位置する声の独特な身ぶりとして音楽的時間を発生させるものとされていることが、精緻な読解によって明らかにされる。そして、マルセル・モースの社会学と人類学、アンドレ・シェフネルの民族音楽学を取り入れた上で、みずからの美学的立場を構築していることが示される。さらにアリストテレス、ガダマーのミメシス論を参照することで、発展的な解釈が提示されている。

第三章では、音楽的時間の感覚的なあり方としての「メロディー」概念の美学的意義を論じている。ブルレにおいてメロディーは、全体的で不可分な創造的持続とされ、そのかぎりではベルクソンの思想と共通する面があるが、同時にそれは、音空間にメタファー的に描かれる曲線でもあり、この意味ではベルクソンと異なる。そのうえで、メロディーとは、具体的に感覚しうる時間の発生・アクチュアル化の経験そのものであると結論される。

第四章では、音楽的時間の非感覚的なあり方として、「リズム」の概念が論じられている。これが古代ギリシア的な根源的リズムの概念に通ずるものであること、さらに、音が次の音へと差異化していく決定的な

一瞬を描くもの、何よりもまず非連続的な「あいだ」でもあることがバンヴェニストなどを参照しながら明らかにされる。リズムとは、それ自体は感覚しえないが、感覚可能なメロディーがアクチュアル化するためのアプリアリナ条件であり、本論文はそれを「超越論的リズム」と名づける。

第五章では、この「超越論的リズム」と音楽のアクチュアル化との関係を検討している。この関係はハイデガー、ベルクソン、バシュラールなどの時間論、さらにヴェーベルンら同時代の音楽などに対するブルレの姿勢との比較で明らかにされる。本論文はブルレの「沈黙」の主題において、感覚を飛び越えて超越的永遠に向かうスピリチュアリズムの立場だけではなく、感覚を先行的に可能にする「超越論的リズム」を確認することを結論として提示している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、今日ではあまり参照されていないジゼール・ブルレの音楽美学を、あくまで当時の思想的コンテキストの内に置き、周辺の関連文献を広く発掘し、それを詳細に読み解く作業を踏まえたうえで、逆説的にその現代性を明らかにしたものであり、着実かつ野心的な論考として、高い評価に値すると思われる。ブルレ研究のみならず、現代の音楽美学・芸術論一般においても、ひとつの学問的な領野を開くものとなるであろう。また難解な思想内容を、よくこなれた文体にまとめ上げる能力にもすぐれており、広い範囲の研究者・読者に学問的な刺激を与える論文となっていることも特筆すべきである。

審査委員会の質疑応答では、本論文の到達点の高さを認めつつ、以下のような点について質問が発せられ、活発な応答がなされた。(1) 本論文を具体的な創作論あるいは作品論に発展させる可能性について、どのような展望がありうるか。(2) 「形態の自己創出」という本論文の問題系について、思想史的文脈における位置づけはどのようになるか。(3) 近代ないしは現代の音楽美学一般の議論と、本論文の議論との関係はどのようなものか。(4) 方法論的な手続の厳密化の必要はないのか。とりわけ現象学的方法論との関係はどのようなものか。(5) 「瞬間」という時間性のありかたについての哲学史的な議論の掘り下げが可能ではないか。(6) 本論文の議論と、ソヴァネらによる「リズム論」を関係付けることはできないか。(7) バシュラールとベルクソンの間の議論が本論文においても重要ではないか。

しかしながら、このような問題提起はあくまで本論文の高度な議論に刺激されたものであり、その論旨を否定するものではなく、むしろそれをさらに発展させるための示唆ないしはコメントとして提起されたものである。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。